

「食道静脈瘤の診かたと治療」

出 月 康 夫 編集

東京慈恵会医科大学教授

亀 田 治 男

近年、肝硬変症の死因となる肝性昏睡、腹水、上部消化管出血などの治療が進歩し、その経過と予後に著しい変化がみられている。門脈圧亢進症に伴う食道静脈瘤とその対策は特に重要な意義をもっており、診断や殊に治療の面において画期的な進歩を遂げた。

わが国では1979年に日本門脈圧亢進症研究会が食道静脈瘤内視鏡所見記載基準を設定したが、この分類は広く普及し応用されている。食道静脈瘤の治療法として、食道離断術、選択的シャント術などの手術療法が行われているが、更に内視鏡的硬化療法が加わり、治療法の選択と方法に種々の考えと主張とが提起されている。食道静脈瘤の診断と治療は、国内的にも、国外的にも注目されている臨床的に重要な問題である。特に、静脈瘤破裂による上部消

化管出血の恐れのある状態を的確に診断すること、破裂を予防し、出血例について確実に止血することが診断と治療の目標となる。

このたび、出月康夫東大教授が編集者となり、25名の気鋭の専門家によって、「食道静脈瘤の診かたと治療」が刊行された。出月教授は1975年透明パルレーンタンポナーデによる内視鏡的直視下圧迫止血法を発表され、更に1986年1月に発足した食道静脈瘤硬化療法研究会の代表的役割を果たしておられ、本書の編集者として極めて適切な方である。

本書は、B5判294頁の、読みやすくまた手頃な書としてまとめられている。また、豊富な写真と図表の掲載と的確な文章とによって、最近の目覚ましい進歩が理解しやすく解説されている。

はじめに食道静脈瘤の治療目標、選択、方法などを概説し、診断法、内視鏡的分類を記載しているが、本書の中心をなしているのは、ほぼ200頁を占める“治療の実際”であり、臨床家にとって最も重要な内容である。

門脈大静脈吻合をはじめとする門脈減圧手術に対して、直達手術や選択的シャント手術が現在広く行われているが、食道離断術や、胃上部切除術、Hassab法、Warren法、井口法などの重要な諸術式がわかりやすく記載されている。また、内視鏡的硬化療法や静脈瘤塞栓術は最近著しく進歩した方法であるが、その術式や成績についても、的確にまとめられている。

これらの治療法の是非を遠隔成績を含めて論じるのには、なお歳月が足りないが、極めて関心の高い領域であるだけに、これらの斬新な問題を整理して集大成された本書は、臨床家にとって直接診療に役立つ良書ということが出来る。広く実地医家、研修医、学生の方々に本書を推薦する。

B5判 294頁 図94 写真136 原色図21
1986 ¥13,000 ㊦400

医学書院 刊